

門 保 9
彌 26/7/9
表 2止

新地回春

新井鏡後子像君美同
野宮心平相中持藤原定基御答

下卷

卷之四

鳥帽の由来



西宮元日着鳥帽之由云々
初後醍醐寺社曰大納言云々
使百用云々細腰信云々
及鳥帽之由来其外之例

傍續

山田云々 持多也云々
俗云々云々
又用唐紙云々
各福也云々

辛卯九月廿七日
台説曰け日詣石山寺依之云々

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 15 lines of text, starting with a large initial letter 'A' in red. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It consists of approximately 15 lines of text, written in a dark ink on aged paper. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text

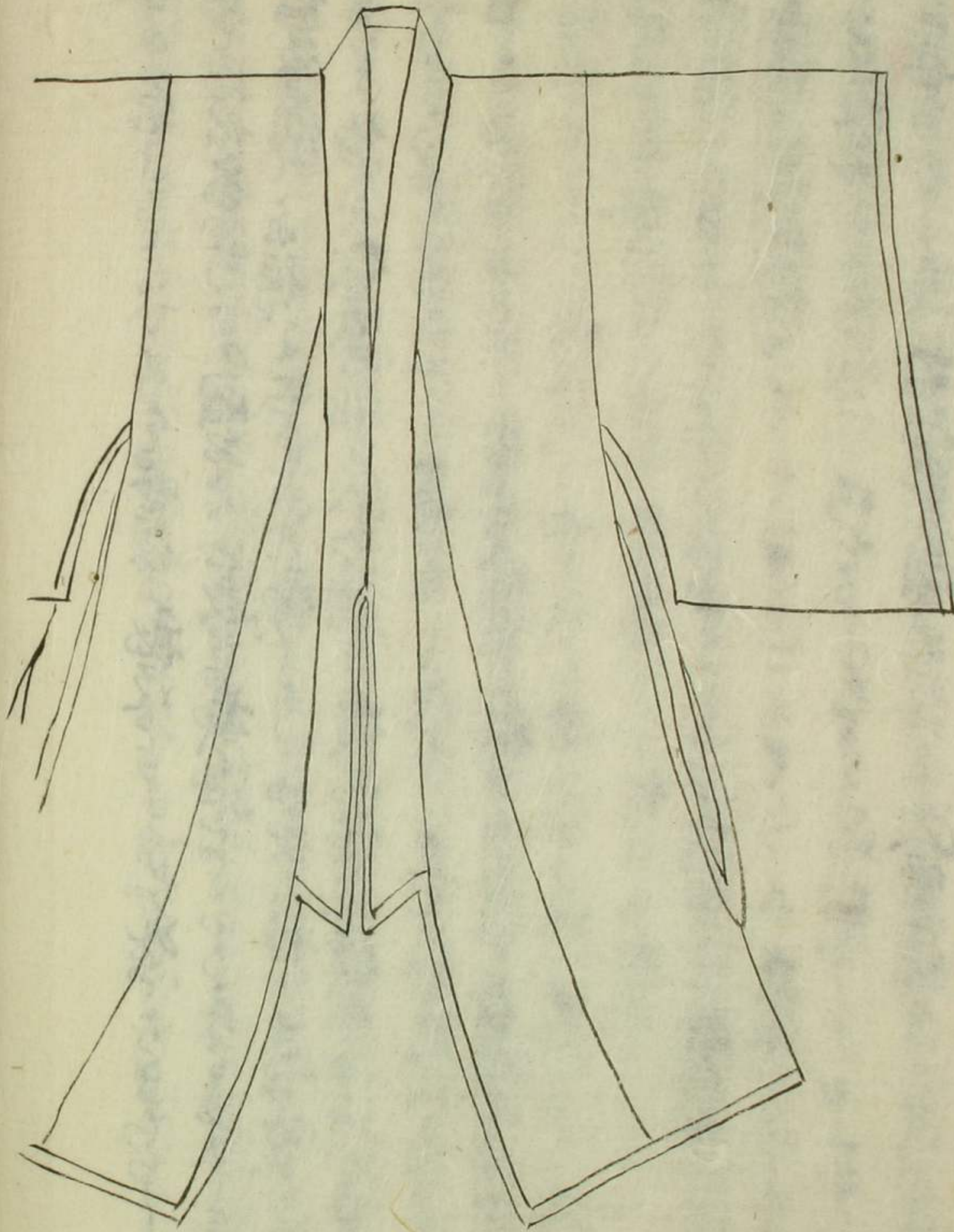
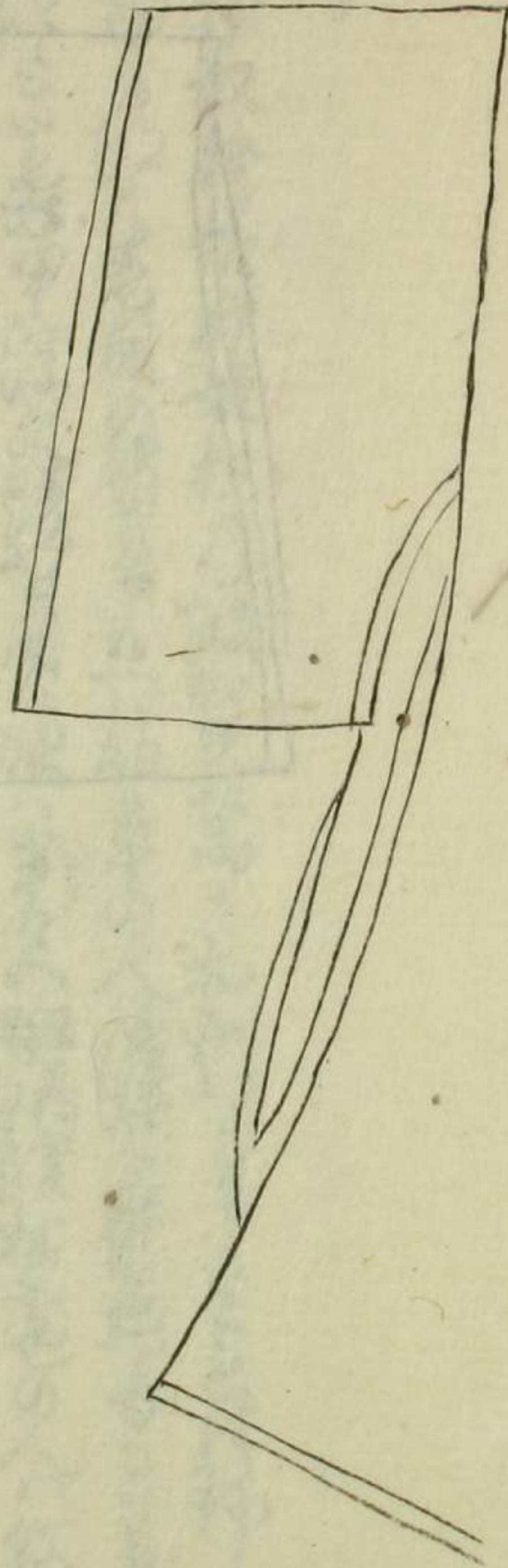
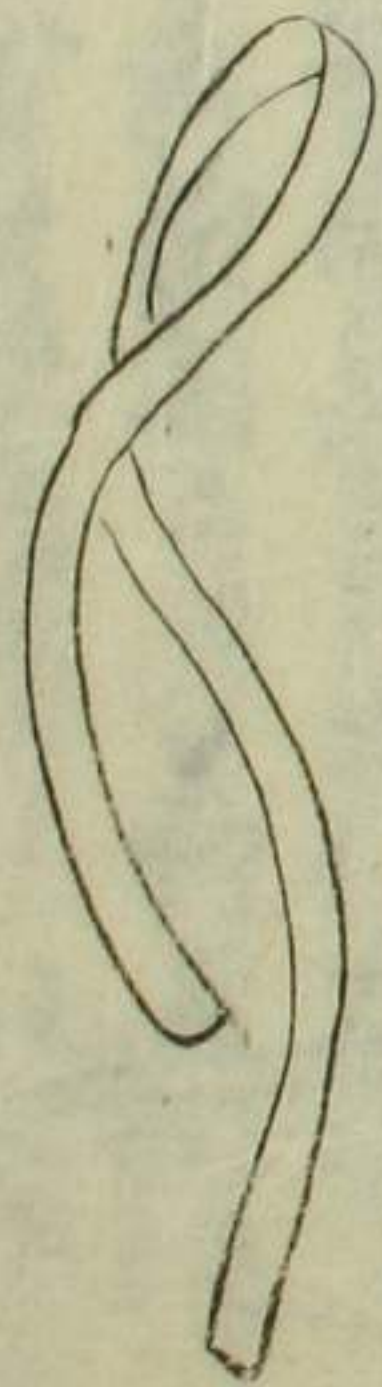
Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. It consists of approximately 15 lines of text, written in a dark ink on aged paper.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. It consists of approximately 15 lines of text, written in a dark ink on aged paper.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. It consists of approximately 15 lines of text, written in a dark ink on aged paper.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. It consists of approximately 15 lines of text, written in a dark ink on aged paper.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. It consists of approximately 15 lines of text, written in a dark ink on aged paper.



四幅布袍上ニテ懸るゝ氣と帯ヲカフ後ヲ三節ニ押入一節係
左右各四節ニテ若クハ五節或白近赤日兵衛尉木用江梅の青一
心葉梅枝柳枝金青糸指付一節紐と右ノカタニ付る前ニ二筋後
小二筋

式目抄曰赤紐左付之後ハ表より内ニ入る前ハ紐ヲ鞞ニトトヒ
トフ

赤紐左右説非有也況大嘗新嘗小忌者付右臨時の如も
帯人青摺者付左依袒襦也

青摺杖

貞丈ニ云クノ葉又
八目波志木ノ葉ヲ
用セノハシキハ其葉
也和名抄ニ見レリ
一名ハ盛母草ト云キナリ

筋抄曰續飯ノ裏衣布ニテ形ナシラ叩テ布ヲ西ノ上ニテ押付テ
覆物踏之具及形ノ上ニ山藍ヲ葉採取集ニ摺之末ニ以墨硯ヲ
摺杖摺ノ朽墨吉ノ如クニ山藍時月次ノ葉目波志ノ頸帟

蝶小鳥小草許身後長五摺ニ或ニ長

淨衣

全麻布衣之祭服ニ用ふる也此淨衣の名あるを其後皆用布
これ神古留素の凡ニ大上天皇の内ノ御社系の時ハ是神の裁
の割に衣をわけて置るに始るといふ淨衣の時禊ハ白布指貫
或ハ用紙物ハ紙袴也

水干

水干曰上下水干ニ述云れり上ニ布衣の裾はひき
こきりしむるに似たりと云ふも右ノ説と異なる後ハ
てたの裾と類す其の伏すはひきりしむるに似たりと云ふ
事ハ其の如し

其... 長... 長...

長...

折鳥帽

中右記台記... 侍五人騎馬... 為狩獵白標原野... 無參御狩... 見見... 使... 折鳥帽

上... 大... 小...

大 小

社ノ... 社ノ... 社ノ...

あしらのたてしきりての載韻會

小袷ハ女房袴袖曰衣の上よりひとりのの上におきし衣のきり
ての表のきりて小袷其の袴のきりてのきりてのきりての中
信表ありては法中よりよきものなりてのきりてのきりてのきりて
九日女房入内を指す台記曰二位整衣當衣袴方袴の領青草
以萌黄織わぬき着濃赤衣並色織わぬ唐衣白羅漢濃袴
是ハ内夜皇太后所賜之衣裳来り著小袷否頗有可疑宣治五年
御曆之使紙を献御衣は衣のきりてのきりてのきりてのきりて
赤衣唐衣之摺裳云々如礼文者似重なる小袷是日高陽院侍
回条太后諸曰着唐衣不着小袷着小袷不着唐衣是之一三有札字
依け言案御曆文唯記不献不記不着二物俱時不用小袷
是仍今日不着小袷款名爲婦人服者小袷申るは小袷

婦人外不用く大袷男女通用也

素襖袴

素細註襖袴下の素袍袴いふは由はなるは字もなるなる不
可同なるも他のはよりいふは由はなる襖袴いふはなるなる上は襖
の造式なる唐後襖いふは布は用らざる襖袴いふはの
殊勝名目いふは

裳

縮襖袴いふは信文の名目いふは裳の造は織いふは裳いふはの
は巾いふは截いふは裳いふはは巾いふは裳いふはの九文いふは截
て且信いふは袴いふはは巾いふは裳いふはの二平いふは孫いふは之我いふは一
固用いふはの九文いふは裳いふはは巾いふは裳いふはの二平いふは孫いふは之我いふは一
信いふはの九文いふは裳いふはは巾いふは裳いふはの二平いふは孫いふは之我いふは一

いふ所のの...
数...
記

...

...
...
...
...

...

...
...
...
...
...

...

...

...

...

...

...

...
...
...
...
...

火を頭と云ふ
 本草曰 鯨魚名大奇珠之時珍發明也 赤白以下出十種の其中
 青緑縹緋の四種見えず 鯨抄云 青瑠璃老年齒人持參之
 故母多之 此を 賜す 但何れも 可同と云ふ 然るに 鯨
 今に 記述 將 節 命 三 用 之 中 何れも 瑠 璃 後 亦 あり 抄 傳 也
 斑犀 節
 本草名 兕 角 郭 璞 註 似 水 牛 今 在 用 之 斑 犀 大 零
 水 牛 之 昔 曰 水 干 之 用 之 也 鯨 抄 云 牛 角 之 水 干 也
 四位 位 位 人 也 述 方 九 韜 也 其 用 後 者 之 玉 也 之 曰 之
 今も 同 事 常 以 斑 曰 分 明 之 事 申 之 事 也 名 物 也 之 事 考 考 通
 天 鶴 通 天 鶴 錦 木 名 見 諸 記 之 故 東 園 天 鶴 言 量 々 説 之 斑 犀
 の 之 日 鶴 羽 の 之 似 也 考 考 の 羽 の 色 似 之 事 有 之 也

本草名 兕 角 郭 璞 註 似 水 牛 今 在 用 之 斑 犀 大 零
 水 牛 之 昔 曰 水 干 之 用 之 也 鯨 抄 云 牛 角 之 水 干 也
 四位 位 位 人 也 述 方 九 韜 也 其 用 後 者 之 玉 也 之 曰 之
 今も 同 事 常 以 斑 曰 分 明 之 事 申 之 事 也 名 物 也 之 事 考 考 通
 天 鶴 通 天 鶴 錦 木 名 見 諸 記 之 故 東 園 天 鶴 言 量 々 説 之 斑 犀
 の 之 日 鶴 羽 の 之 似 也 考 考 の 羽 の 色 似 之 事 有 之 也

細金華鏝、白土註の貝青目、貝細金具、又沈地の雁鳥司
 家抄曰沈地、廬橋御、銀細、寶金、璣、瑠璃、花銀、丸螺、細
 叙文之踏、踏孔雀、記者、卷の、時給、螺、細、玉、系、系、抄、曰、遠
 所行、華の、漏、等、之、又、辨、加、貝、の、時、必、用、之、

也、この、片、乃、幸、之、用、く、る、大、つ、は、亦、金、目、も、用、く、る、ま、い、
 螺、細、叙、目、の、事、の、こ、ろ、は、沈、地、の、下、目、金、と、い、
 へ、の、事、な、ら、ぬ、

通螺、細、叙、の、松、の、極、ま、る、小、地、極、ま、る、

鎔抄曰先年、隱岐院御、逆修、御法、事、の、日、予、為、之、位、事、將、用、極
 螺、細、叙、極、上、景、羨、と、極、極、普通、入、道、相、國、常、螺、細、由、傳、新、と、
 其、時、上、皇、御、曰、極、螺、細、叙、の、通、用、之、者、を、く、人、の、用、口、由、同、之、

黒極叙

同抄曰、同、禎、元、年、十、月、十、九、日、佛、名、次、或、公、の、語、曰、系、極、上、極、常
 之、事、の、事、極、叙、極、叙、銀、細、極、上、下、流、の、中、黒、地、蔭、給、延、唐、草、上
 下、淡、色、地、之、極、叙、上、下、方、の、大、尺、之、執、蔭、給、叙、執、螺、細、
 以、叙、有、二、極、上、の、元、山、院、と、い、

銀極叙

安元二年二月六日、法皇御、御、玉、葉、曰、午、刻、着、東、常、下、重
 取、上、衣、袴、沈、地、銀、極、叙、細、叙、系、統、平、緒

金極叙

同上、同、白、堅、文、織、物、柳、下、重、未、衷、堅、文、表、袴、沈、地、金、作、金
 極、螺、細、叙、細、叙、系、統、平、緒

金極蔭繪螺細叙

治承元年三月十七日、蓮花王院、玉、葉、曰、着、東、常、也、曰、東、常

金樋時繪螺鈿劔斜地平緒

水精樋劔

大治三年四月三日時時容王書曰紫檀地水精樋金作劔
件樋底以綠青透浪形以金與形作之

金銀樋劔

保元二年正月十日南觀人車記儲部入道曰右大臣后御東
也常水精柄沉紫檀地孔雀螺鈿金銀樋劔按此記朝
の裏表と三方の沉と紫系相とと三方の金と三方の銀と
其三方の金樋一方の銀樋とて風流作さる劔は年竟樋と
よの金この銀も水精とて時時地と水地とのこころ中央
も地とてしたるものを用はし時時地と水地とのこころ中央
也

時繪劔

鞘は希ふらふらイカケの沃蕪地とて其のふらふらとて後々

仁平元年二月廿二日侍從降長拜加具

台記曰慶加具笏竊通天帝九鞞鴉鴉螺鈿劔時時孔雀干

緒紫紋己上御前借賜兼亦五年四月廿四日侍從長拜加具玉葉

曰時繪劔御前時時劔青水元年十月九日中將良経拜賀玉葉曰

申刻着束帶色日如常葦年時繪劔大殿御前馬腦方具

二子親王海浦白時繪劔見劔抄

葦年干

初の意を時繪劔の繪のあらはしむるは
情同しむるは時繪劔の繪のあらはしむるは
の

葦年

狩と鷹の平麿御所へはさしつけしりやむに物草の白麿法叙之日

入賢侍人の

沃地^{ヲチ}

自^ホ丈^シ三^ノイ^ノカ^ノ地^ノ
ハ今^ノ世^ニス^レリナ^シ
地^ト云^フ物^セ

所^ノ法^ハ叙^スも^ハ修^ルに^シテ^ハ申^ノ通^ルに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス
是^レ又^ハ沃^地の^ナル^{コト}を^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス
又^ハ沃^地に^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス

金作叙

其^レ金^作叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス

其^レ銀^作叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス

其^レ近^來中^外將^叙金^作叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス
其^レ近^來中^外將^叙金^作叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス

其^レ素^金銀^乃及^シ白^鍔聽^爲五^位之^上股^用之^銘也^ハ何^依金^銀大^臣之^納言^ニ在^リ差^別の^金銀^ト別^ニ形^刻り^モあり^ナ叙^ス
其^レ金^具皆^同金^也

平麿叙

自^ホ丈^シ云^フ塵^地ト^云ハ
今^ノ世^ニ叙^ス地^ト云^フ物^セ

長^和二^年正^月十^日小^右記^曰内^{大臣}者^平麿^叙を^文帝^同年^十月^廿二^日回^記曰^予者^平給^柳色^下重^平麿^叙一^条家^抄曰^蔣繪^叙号^平塵^叙今^按古^人蔣^繪叙^ハ沃^地に^シテ^ハ叙^ス
其^レは^あら^んを^して^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス

薄塵叙

輕^服叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス
其^レ符^水日^扇符^以上^如恒^叙沃^地に^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス
其^レ下^重機^叙叙^スに^シテ^ハ叙^スに^シテ^ハ叙^ス

表袴 ^{面純色} 卓白帷口上これ等之文は懸地りなりと云ふ
前より叙の

黒漆劔

名目ま漆劔は延喜^{正式}曰凡畫劔五位以上聽之との
仍五位以上者不特繪劔なりそのおもふ用の中も漆劔六
位以下は諒旨中公御以上用之依凶事撤其劔なり止將流
波用是漆劔これ常ををさして凶服とせざるなり凶服に
依恩流波^惜は恩深情厚恩流^{情厚}は恩流^{情厚}人
制^等服從其情いよとせざるを喪一切止る劔の依服時或
用^爲塵或用^漆用^爲塵の情厚者之安元二年建春門院
山崩日輪禪因兼実公^用是漆銀作藍草劔保元二年
多羽院山崩花山院相国忠雅公^用是漆黒金物白草劔用

之且柄金物塗まは相公院同用是漆劔又有流深なるは凶
喪^依義のものいよとせざるを喪一切止る劔の依服時或
用^爲塵或用^漆用^爲塵の情厚者之安元二年建春門院
山崩日輪禪因兼実公^用是漆銀作藍草劔保元二年
多羽院山崩花山院相国忠雅公^用是漆黒金物白草劔用

鳥頸劔

鷹^頭劔并帯^銀劔は銀作りて螺鈿劔の柄多し其を喪との頸
を造りてかなる斑摺の尻鞘^ハ由見天永四平節時々記の
せりも中思の可敷信と云は喪束ひるる人形^の劔柄首多頸
こら^ハ杖の杖なり

尻鞘

石虎豹猪鹿の皮を^表ありて^裏の鞘よりけり今俗に

とも辨る。引きつゝ、鉛澤の如く、蓋し尾鞘の如く、そのうらり草のちゆと、先づの仍り尾鞘の如く、臨時祭祭人用之、白馬節會、叙列五位次、將此、叙入尾鞘の。

竹豹

臨時祭祭人用、用、尾鞘、竹豹、梅竹、豹、以對、水豹、稱、竹豹、の、詳、註、馬、具、左、筆、條、下、の、

鹿皮

春日祭、近、出、使、路、頭、の、時、繪、野、劍、加、鹿、皮、弘、尾、鞘、由、見、定、家

斑猪

仁平元年十月十五日、春日祭、冬、陪、從、裝、束、台、記、曰、猪、皮、尾、鞘、今、季、
p、之、須、用、斑、猪、孰、得、或、用、猪

斑猪とは、うらりある物、
ふ、猪、の、毛、の、
よ、の、用、鹿、皮、の、

繪尾鞘

左近府隨身用之、は、日、祭、祭、人、或、用、左、近、出、の、豹、を、畫、野、文、の、右、近、亮、文、の、平、竟、繪、尾、鞘、を、用、豹、虎、皮、箱、を、尾、鞘、と、作、り、左、豹、色、と、うらり、其、上、の、畫、野、魚、形、の、虎、も、日、祭、の、あ、つ、て、皮、毛、の、三、彩色、の、繪、の、た、く、を、注、録、二、平、十、月、晦、日、五、葉、曰、繪、尾、鞘、劍、虎、皮、文、
衣、の、之、能、名、書、を、割、を、假、し、の、の、と、い、ふ、は、何、れ、例、の、

箱の

建曆元年十月二日、或、記、曰、繪、尾、鞘、劍、野、文、地、の、虎、文、色、取、其、上、野、文、之、也、見、也、
繪、尾、鞘、の、畫、野、魚、形、得、真、形、也、名、由、多、猪、

僻案もろりし右身形由こゝれ記出る事なきに依後
朱々信る

細尻鞆

先きの臨時祭使春日祭使路頭用此尻鞆にして用平鞆叙故
之鞆より細斂の尻鞆とせん但今今各目より之を以て
記録可し

平緒

紫綵平緒

綵正の綵の字もゆるゆる音と假借して段淡綵の字通用是
も日記之常事也其の由も定むる事新し
申すもいふ事未詳清新條下は新し
二もを仍加新字の地平緒もいふ見よる事其の地平緒補

錦抄ニ端ノ字
ヲモ假用ナリ

多用黄鳳の以黄糸繡鳳凰の飾杖曰孔雀尾長多唐花の
花繡之由見ふ何れにも多糸繡も白糸もいふ事ありて
此節會行幸拜賀未用此平緒の時斂は衣束紫糸革の
青綵

綵の字も同し玉の断は稱標断同物也凡平緒は下重の色
ぬきこめていふ事ありていふ事ありていふ事ありて
交はれり其の實は後にも其の實は下重仍用青綵は平緒青
白糸繡糸を交へ故標花の色に似り其の實は下重仍用青綵は平緒正
日用躑躅下重着は平緒例有る也日記亦稱棟断は正月不
可稱標可稱青綵の飾杖にも青綵或稱棟端との言の自
束杖曰衣束命下は標花用比五月許着之云云而も細い事
標綵青綵糸綵交へて四五月比着之青綵有る事糸白糸の由

の大將軍の... 白檀紙或紅紙
... 時後... 日記... 見...

平胡錄 木地螺鈿 時後螺鈿 時繪

西地、沈地、紫檀地、青見、時繪、花、雲、繪、漆、兼、二、平、正、月

玉葉、二、月、八、日、外、未、能、見、九、条、紫、檀、木、地、紫、檀、地、螺鈿

後、後、唐、草、孔雀、雲、繪、を、時、後、に、極、珍、政、に、推、し、由、り、彼

國、二、条、紫、檀、を、し、し、け、因、て、年、し、支、造、り、胡、漆、の、其、時、後

故、殿、下、令、造、り、極、珍、螺鈿、の、西、國、を、可、み、使、し、由、り、命、の、可

用、孔雀、外、地、う、西、後、に、寄、り、ま、も、解、の、意、し、由、り、命、の、可

能、用、西、國、鳳、雲、繪、の、西、後、に、寄、り、ま、も、解、の、意、し、由、り、命、の、可

死、因、し、由、り、命、の、可、み、使、し、由、り、命、の、可、み、使、し、由、り、命、の、可

春

[Faint handwritten notes]

九緒の祖、の、孫、其、の、祖、父、形、の、西、後、に、寄、り、ま、も、解、の、意、し、由、り、命、の、可

後、二、月、八、日、外、未、能、見、九、条、紫、檀、木、地、紫、檀、地、螺鈿

玉葉、二、月、八、日、外、未、能、見、九、条、紫、檀、木、地、紫、檀、地、螺鈿

後、後、唐、草、孔雀、雲、繪、を、時、後、に、極、珍、政、に、推、し、由、り、彼

國、二、条、紫、檀、を、し、し、け、因、て、年、し、支、造、り、胡、漆、の、其、時、後

故、殿、下、令、造、り、極、珍、螺鈿、の、西、國、を、可、み、使、し、由、り、命、の、可

用、孔雀、外、地、う、西、後、に、寄、り、ま、も、解、の、意、し、由、り、命、の、可

能、用、西、國、鳳、雲、繪、の、西、後、に、寄、り、ま、も、解、の、意、し、由、り、命、の、可

死、因、し、由、り、命、の、可、み、使、し、由、り、命、の、可、み、使、し、由、り、命、の、可

平胡錄

靴の形は... 昔の書に... 有月高説今...
指草信云... 足返歌... 靴の形...
二... 又... 靴の形... 今... 靴の形...
二... 靴の形... 今... 靴の形...

靴 水精管 角管 金網管

靴の形は... 水精管... 角管... 金網管...
靴の形は... 水精管... 角管... 金網管...
靴の形は... 水精管... 角管... 金網管...
靴の形は... 水精管... 角管... 金網管...

靴 羊靴

靴の形は... 羊靴... 羊靴... 羊靴...
靴の形は... 羊靴... 羊靴... 羊靴...
靴の形は... 羊靴... 羊靴... 羊靴...

靴 革鞋

靴の形は... 革鞋... 革鞋... 革鞋...
靴の形は... 革鞋... 革鞋... 革鞋...
靴の形は... 革鞋... 革鞋... 革鞋...

靴 絲鞋

靴の形は... 絲鞋... 絲鞋... 絲鞋...

緒太

これ信名に上古林裏を檜柳を用ひて観應二年四月四日
園大曆三十九年今ハ燈心草を編て作らん

踏徳

只今弊人のまねあてふも全禱を用ひ左右よりあてて
紅の紐を上ゆと結ひ常の脛中のことなる

鳥皮履

礼服の用系履

永万元年七月廿七日山槐記曰可着鳥皮烏白黒高参仍相
具之有示緒襪上結之如指徳三阜重裏白黒漆指徳
は信名高へ傳下る

漆履

平生西國の漆履を今亦りぬりて用ひたりて多し
とるは履く草より下るもの凡履は漆履の外用木
履を穿るもの木履といふは信名抄にも紀具都の志
の履子の記に記修なるは信名抄に記する草として漆履
は信名抄に記する草として記するは信名抄に記する草として記する
用漆履以木作者不可用之今用草草は堪用とてその彼
経履といふは信名抄に記する草として記するは信名抄に記する
は信名抄に記する草として記するは信名抄に記する草として記する
唯平は信名抄に記する草として記するは信名抄に記する草として記する

深履

和名枚深頭履言其深髪覆足也との古本用深泥由白

草履

今亦所佐字利本云稱之曰物出也其草履水白の服者云
之仍三三春下官事喪五旬之月件履之細細ありあり
海之つら者も其の及り

山草履 唯名目見物具は袋束扱り事助得らん

已前條に陸勝勝之玉脚觸眼のりりありあり
る及海之履之字は海之受倍の字誤り憶以金根為金銀
之誤可也

唐靴

異朝之西原靴之習其の山邦先造を於祿唐靴の
治平二年四月賀茂未近中使右將家朝臣下國唐

自丈云唐靴
靴水干靴御幸
海和露等名
ハ靴橋ノ名ニハ
非ス馬ノ飾

物具ノ名也野
宮殿モ礼事ヲ
知ラズシテ答
タミヒシ故オホツ
カナキ答也其飾
物具諸雜日記
ト云ナリ

靴形を因自新翻之由因山槐記の唐靴形之云は物出唐
靴之字一先年今更に其の靴之字あり其
之且其面朝鮮唐之字あり其の靴之字あり其
唐靴之字あり其の靴之字あり其の靴之字あり
他人に買たる不記の字あり其の靴之字あり

移靴 一何何 其の靴之字あり

和靴 其の靴之字あり

水干靴 其の靴之字あり
水精地 銀地 鏡地
一糸家扱鏡地 註ニ赤銅トハ靴ノ推量也ハ最傳後傳

極上之洞とていふて... 銀地水精地... 一向今按の

王地 貴地 老甲地

是地は唐鞍の... 信地... 唐鞍

唐鞍 唐鞍

鞍橋 和名抄云良保社と訓し... 唐鞍と用馬地橋由見信鞍記... 也今按唐鞍とて... 唐鞍

あまの

表鋪 和名抄鞍褥字波之歧と訓し... 高麗馬

鏡 註半古 古長く條下の

力草 和名抄近鞍知賀良加波と訓し... 名目今

鞍 此のと同事... 武元純は... 唐鞍の

其形是... 銀抄... 唐鞍

日本金銅... 金銅... 唐鞍

唐鞍

銀面 馬面... 銀面... 馬面

乃軍用ニ設てるものなりといふはたゞ院の爲に造りしり或は造りし
馬にてる振る今も御中の也

草蒲形

和名抄曰草蒲形獨斷云金鍍祖義及字亦作鍍今按
俗云銀面之曰蒲形是也馬冠也高
廣各五寸如三華形者也形分明は須馬面の高は二寸
形の如く草の葉の形也

前袋

和名抄曰前袋形者馬の前の袋也今按云乃大位首蒲形と御代をてるものなりといふは御代の御代の

尾袋

和名抄曰尾袋形者馬の尾の袋也今按云乃大位首蒲形と御代をてるものなりといふは御代の御代の

頸総

八子

具形見銘抄に今も御中の也
形見銘抄に四緒の形は由借抄の後に鈴を
付たるものなりといふは御代の御代の
國の形は今も御中の也
今も御中の也

大滑

和名抄曰大滑形者馬の大の滑也今按云乃大位首蒲形と御代をてるものなりといふは御代の御代の

杏葉

和名抄曰杏葉形者馬の杏の葉の形也今按云乃大位首蒲形と御代をてるものなりといふは御代の御代の

其書與因銘抄の付在りしもの

革鞞 其形因銘抄の

攝蝶 一向不動得の

鈎付

和名抄曰鞞 焔 鞞鞞也楊氏漢語抄曰都冠北 鞞會曰雙
佳及集韻鞞鞞又鞞回反鞞遼帶也正字通曰鞞俗鞞字
和名抄曰考聲切韻曰鞞 焔 焔 焔 焔 焔 焔 焔 焔 焔 焔
切見時鞞鞞二成中の鞞鞞とてわすれられしもの
奥書未抄の鈎付のものとてわすれしもの
正字通の鞞為鞞俗字の時和名抄を考へしもの
中のものも又遺るものもなかりしもの

子繩 又繩 引繩

此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の
此と云ふもの 條下に在るもの 己上唐鞞の正字通の

信範記多傳
之註又
錯亂其義難
通

移鞞具

鞞橋 移鞞橋形不詳得の

左筆 切付の左筆とてハ豹虎皮の付るハ虎豹皮とた

多しものなきは格の事曰記に名曰り人の御院家の事云々
 抄に竹皮サヒツト訓を付竹皮とい虎豹の皮といはるる豹は竹豹
 り凡虎豹者不棲林木木林地畏趨前事見百川學海談藪
 の圖書に豹も虎豹の必書竹林の竹皮とい名付らるるといふ
 定家公装束抄にも春日近衛使路に如左記尻鞘由西人の
 け尻鞘を左豹之鞆右虎文尻鞘之且自應元年十月五日或
 記曰繪尻鞘劍鞆之地は虎文の取之且上鞆文之右ハサヒツ是
 ハ虎文許之是と稱左鞆とい永仁六年十月五日仲定記云
 及内舎人^身宗用平文移馬界下鞍探々豹皮文とい初合
 彼初日て左鞆ハ豹虎ホ下鞍分鞆の款
 大滑
 といはるる用青革由見あは信之記に

轡

回不易ゆい

後

あは記種芳打物押伏細由り

鑿

鑿ノカモツラ

鑿正字通馬絡頭トハ鑿抄三平文堅食金物也

付申見申の推量ハ今三尺縷と申はるる又荷付馬ニ鈴板
 と申はるる鑿を絡て鈴板を申はるるハ鈴板鑿を申はるるハ
 厚らん後鑿ハ鈴板馬也なりと申はるるハ鑿の白皮ハ馬の
 記西人の馬也記ハ鑿鑿頭とい其註ハ果皮付金堅食文由
 西人の

鈴

上よりいことハ後ハ鈴板なりと申はるるハ鑿鑿

小付鈴といふらん

和駒

橋シラキ只今武家方四月ノ節ノ神ノ物シラキハ傍抄ニ流籠或ハ所注
由西ノ山ノ地ノ人ノ物ノ二年玉葉也

表鋪 不其也也

切身 四信ハハ豹皮五位以下虎皮見錯抄也

大滑 不其也也

泥 錯抄澄石短台長ハ西ノ人ノ唐鞆ト曰事也

尺障泥 和名抄ハ阿不利ト訓ハ用何草トモ不其也也

物具抄尺障泥トハ尺字不通也

鞆 連着楚鞆 連子泥 辻泥 空是也也

副鞆 只今ノ鞆ノトクニ地ノトクニ鞆トモ也

小徳 右徳ノ對ニ中徳トモハ右徳ノトクニ也

切身 和名抄曰唐韻曰鞆 則前反和名鞆鞆也物具抄曰

切身ノ口ナリ鞆

小豹 本草集解云我ノ土豹トハ宗奭曰豹ハ赤黃其

文黒如錢而中空也又右土豹更云其物也其形而小

其各有種能變形ノ物具抄曰竹豹ハ小豹ヨリモ勝物也

竹豹 和名抄ハ土豹也トモ也

虎 五位人用ト由人ノ物具抄也

草平康 諺周鞆ト用ト由尺錯抄ハ宮鞆トモ也

水豹 本草集解時珙曰海中有水豹トモハ六位用ト由

刀ハ物具抄

鐙 壺 舌長 羊舌 舌短

聖德太子ノ壺池トシテ法隆寺宝物中トモハ故宗恒朝臣

所傳子所預記也

凡の... 許踏... 本... 曰古唐... 年... 之... 瘡... 纏... 白... 務...

杖... 差... せ... 紅... 鹿... 只... 山...

新復有後... 須臾草之... 差々繩

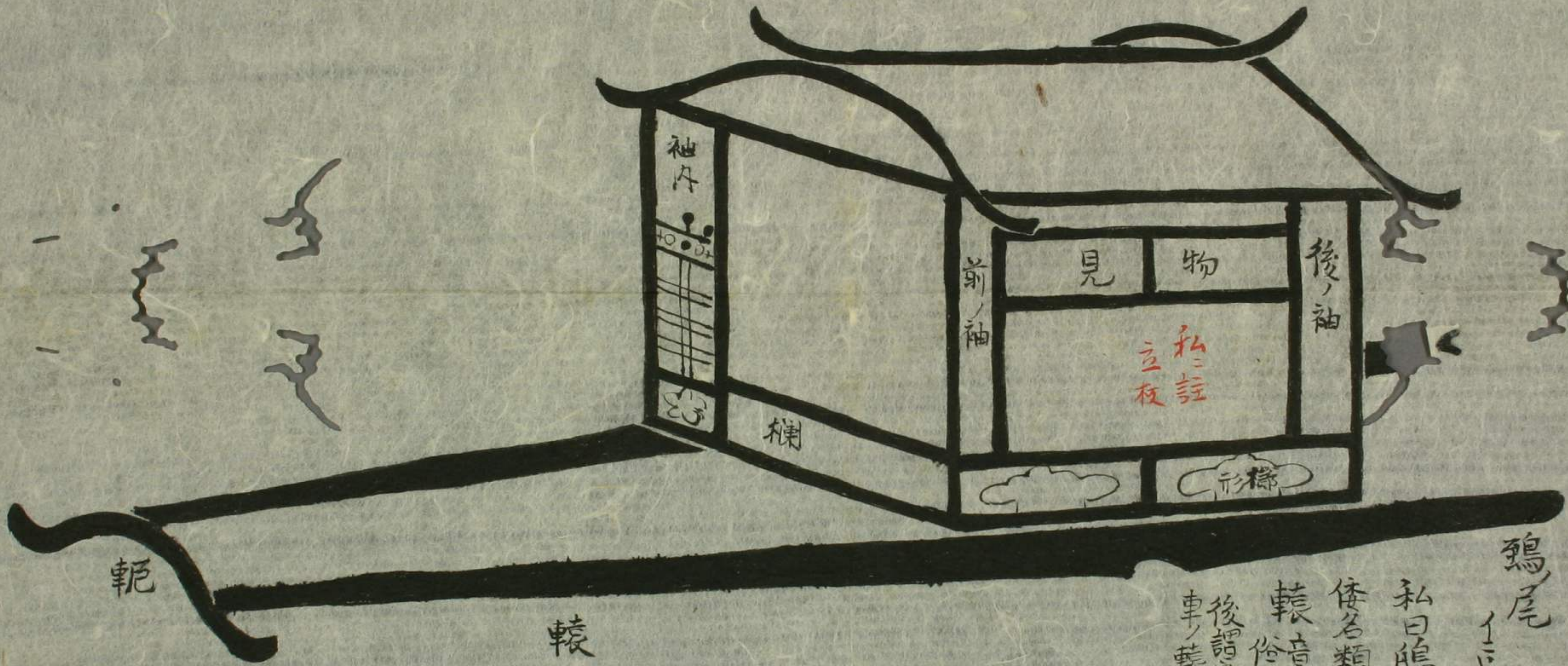
差々繩

綾布文布... 物成抄... 之指... 車 圖在左

飭車

賀茂祭日近衛使中宮... 年右少將... 之代々... 朝臣... 治承四年四月十五日... 右透物見... 鞆... 祭者石清水賀茂... 人着青摺袍... 之作臺者...

凡車者所之有其名仍圖之註之



鴉尾

一或為尾上

私曰鴉尾下可為回事

倭名類聚故曰

輓音圓和名奈加江

俗在前謂之輓在

後謂之鴉尾或云小輓

車輓之

去ノ中略才四人或二人治承二年六月十九日山槐記曰園白屋女
將那家之慶賀中略才一人及下中略才左府生卷宗清
子藤芳上下帷同略才右府生下乞野教兼子二藍上下
紅引陪木各未賜名

西ノ如也ハ大概也ハ後花人具中略才ハ若限攝家
ハノ如也ハ

變繪袍獅子熊變繪布袍

變繪袍變繪布袍ハハ依記源或畧布多或加布官官紳
變繪者文也袍者裾地ハ布也裾者ハ狩衣後幅賤者之服也ハ
公者紳滿菊深稜芳麴塵野摺ハ中ハ白用ハ黄布摺拍
稱ハ野摺貴ハ永治中治左府記ハ變繪者依借音ハ右記
用般罽者字般罽者般曲團文ハ左近裾獅子丸右近熊丸

或考考九ノ如考考名長也天仁以朱兵部府亦用
獅子能由凡園天曆但嘉承二年四月十七日賀茂祭近衛使
右少將信通朝臣略才用智丸凡永昌記又右近中府用獅子
文例見治承二年十月晦日玉葉ハ變繪又用縁ハ又不同彩
ハ深分袴

綵代

和名極毛席以五色絲為之如け祝者俗云毛纏モウゼハ毛席代ハ
用紺布畫變繪仍稱紺布畫繪綵代敷胡床及節會日
臺般罽元元ハ下ハ

深分袴

本陳左右列ハ付て深分ハ名出承ハ左近稜芳右近朽葉行幸
及放生會用ハ左近二藍右近以明本稱ハ役色賀茂春日祭近水

使乃暗日用之或左右共用未濃

白襖袴

註襖之條下之彼襖袴と隨身仕来より隨事通用しつゝなる
昔赤脛中

菓者草ニ市比しやい何れあ多有之紙の本のゆるある皮
をむしりて麻糸の糸をこらゆるものこまを編て用脛中深
泥より殊有ゆるもの

裱衣

註赤雲後袍條下より

白狩袴

指負くは和名抄指負のトハ注し宮袴のゆるきもの
壺脛中 不勘得い

錦袴

文獻通考曰袴之制一當四月一當背短袖覆膊只今陵王家
張ニのりたるを足頭紙とて是のる者多のねあるもの左の
端乃きそをわも花をたるねら今の袴袴も頭紙と用
いと四月相合のの覆ゆるものいたがひもなるもの
練樂とも用はし結のよあるもの

掛腰

和名抄曰唐樂令云兼天樂舞人四人紫系後袍接勒唐韻於
接腰今も世比江もら掛甲ウチカケ之時袴衣のありもの
細腰あはるもの袴をみらねをねらひらね女りのこと表
と紫系後重袴芳直と活の吾腰のありたなとも細と
紫もみらね掛甲説掛甲の上結之又二説掛甲の下脚腰の上

衣裳束付物

永曆記曰小舍人童浮線後得衣袴濃布治嘉二年十月七日
待從時寅 山槐記曰小舍人童二人朽葉上下崩不衣袴芳
單

水干袴 睡巾

水干小舍人童用之例未見得之睡巾又見是時の出
具枚を其例の

雜色

雜色の定の人 治嘉二年十月廿日玉葉曰雜色人
衣裳束付物 袴芳指衣袴袴濃布出袖青早衣造氣

平礼上ハケ 白張上下 乱緒

上ハケ 乱緒不勘得治嘉四年石清水臨時山槐記曰

系人待從實保雜色人不得為白張平礼

車副 人足不勘得の

烏帽子コウヘ 襖袴コウヘ 定免格の

養和元年十月廿日女院新山所渡御 玉葉曰亥終有渡

御大將半部車車副牛童各布衣永仁六年八月五日御幸

始竹林院左府公公衛公 記曰御車副二人褐衣冠綬睡巾如

例

牛飼

永曆元年十月十五日山槐記曰典侍車牛飼着赤色上下出

款冬衣

居飼

人足先日ハ治承元年十二月十七日

蓮花王院塔供養 玉葉
臨幸少將良通供奉

曰居飼人装束 暹紅黑袴襖布下袴烏帽子子藁水白

馬部 メフト云

右馬寮の下目^二人由見馬寮式^一延嘉式曰緋袍襖^襖襖

子^襖不須 帛汗衫各一領 飼布袴一腰 細布一條 長天註隨

檄損中官請受 得野行幸之日 着緋調布袍袴

飼一

飼一字非者自畧^茶誤^之丁ノ字^二なる^一寮下目^二

馬寮式曰凡細馬十疋中馬五拾疋下馬九疋牛五頭每年

四月十日始飼青草十月十日以後飼乾草 馬日二束半牛二束 其 別章十斤二兩

飼丁馬^別三人以出士充^但刈青草丁并飼牛丁^共七十四人

予云^凡仕丁^者之令^而借^男九一為^丁其装束^式曰黃袍

汗衫調布袴革帶布襪長縮巾子幘頭

細馬

鷹飼装束

錦帽子

天永四年正月十六日長秋記曰烏帽子ウワヲカケリ其上着錦

帽子又ウワヲカケテ結緒片鈎^一

其の烏帽子のしり糸錦帽のウワヲカケリ其上に結緒片鈎

かゝるもの結緒片鈎の式は延嘉式に依る

紫纈袴衣

天永七年秋記云飼装束烏革袴^袴烏^袴額^文結^文

額^文額^文指^のこ^とは^深き^也

白布袴

長秋記曰裏面袴由^二心^一の

行^騰

和名無加波岐三長秋記熊皮行騰日一々

餅袋 長秋記

大銅世袋末

江右の會同大銅世袋末に何記の勅也裁也
江右の會同大銅世袋末に何記の勅也裁也
江右の會同大銅世袋末に何記の勅也裁也
江右の會同大銅世袋末に何記の勅也裁也
江右の會同大銅世袋末に何記の勅也裁也

右冊因同日聯汚與書及弄曲二千年今遂段不
先推量未氣の四子世偏不字後而也世且以序府在近
不及清書也草書書三心可如留留之陳投大申句合外

見

室永 辛卯二月十五日

松堂閑人

野宮定郷也

正德二年二月七日於灯下校合年 此本在田道格執心

筆之草書為報執筆功直 道格賜之又新并氏六門
中平并氏之通信書也也 彼和曰氏六門揚之申道
校平并氏之通信書也也 下三冊之六新并氏六門曰氏一
元英一和持和之秘抄也下通例也下後日之後抄也元

于時正德二年二月七日 荒川元英

此書雖被秘依也初之得恩借息遂祥字二授平

于時正德二年二月七日 野宮定郷也

昔宝曆第十一月十六日

中川定純

安永三年癸酉十月

源義方

Handwritten text in Kuzushiji script, likely a letter or document, starting with a large character '一'.

Handwritten text in Kuzushiji script, continuing the document.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or date.

文化二年五月九日寫終
吉川元正

天保二年五月九日寫終
山崎元正

